

江戸期における重商主義論の展開

——佐藤信淵と横井小楠——

折 原 裕

はしがき

第1節 佐藤信淵の観念的重商主義論

第2節 横井小楠の現実的重商主義論

おわりに

はしがき

石田梅岩の商業職分論にはじまり、山片蟠桃の自由市場論を経て、海保青陵の一番重商主義論にいたる、江戸期経済思想の展開過程¹⁾は、商利肯定論の発展の過程だった。その過程は、同時に、商品経済の合理性認識が深化する過程でもあった。商利を肯定することは、商利を生み出す商品経済を肯定することに通じ、商品経済を理にかなった合理的なものと受け止めることに通ずる。そして、商品経済を合理的なものと受け止めることが、商品経済の合理性自体の認識を（それが多かれ少なかれ楽観的な認識になるのは止むをえないにせよ）下支えする関係になるわけである。

とりわけ、海保青陵の場合は、彼が武士階級に所属していたこともあって、商人的な立場に立脚していた石田梅岩や山片蟠桃の限界を越えて、生産をも含めたトータルな商品経済の合理性認識に接近しえた。梅岩や蟠桃の理解した商品経済の合理性が、とかく商業内部の合理性にとどまったのに対して、青陵は、商業活動が生産に及ぼす影響をも視野に入れた、より包括的な商品経済の合理性認識を確保することができた。青陵は、たとえ

ば、商業の活発化が生産を拡大するような関連を、よく理解していたのである。

しかしながら、青陵にとっては、商利を肯定し、商品経済を肯定することは、単に商品経済の合理性認識を確保するという問題にとどまらなかった。青陵においては、商品経済の発展の中で、その発展の成果からとり残されて窮乏化していた、武士階級の救済こそが課題だった。それゆえ、彼は、「貴穀賤金」思想から発する商利否定論を退け、商利を肯定した上で、武士階級も商利を追求してよいのだと、強く主張したのである。

青陵の主張は、具体的には、藩の指導の下に他藩との交易を進め、その交易の利益を藩が独占することであった。つまり、青陵の主張は、自藩市場と他藩市場との価格差を利用して得られる商業利潤を、藩の財政の建て直しや、藩内武士の窮乏化を救済する原資にしようというものだった。青陵の一連の議論を、一藩重商主義と呼んでよいわけもここにある。

商利肯定論が、政治の担当者である武士階級の手に入ったとき、それは、重商主義政策という政策的主張を導くのだった。このようにして、江戸期経済思想における議論の重点は、やがて、商品経済そのものではなく、商品経済をいかに政治的に利用するかという点に移ってゆくことになる。

青陵とほぼ同時代人である本多利明の場合が、その典型例であった。²⁾利明は、一藩重商主義という青陵の限界を越えて、一国重商主義を唱えることができたが、彼の商品経済に関する認識は、青陵のそれを越えることができなかった。むしろ、利明の商品経済認識は、青陵のそれより大幅に後退したものだったと見てよい。利明においては、商業がもたらす商利の大きさに目を奪われて、商業の機能それ自体が十分に把握されることがない。商業への内在が不徹底なために、利明は、商利という商業の果実だけに注目してしまう。そこには、当時の通例としての富商憎悪も作用していた。利明の場合、商人の手に落ちる商利は、一種の不当利得と把握されてしま

うのである。

だからこそ、利明は、商人ではなく、為政者が商業の担当者でなければならぬと主張するわけである。それは、商利を商人の手から為政者の手に移転せよと主張することと同義だった。明らかに、利明の関心事は、商品経済そのものではなく、商品経済をいかに政治的に利用するかという点にあった。議論の重点が経済ではなく、政治に移行してしまっているのである。

利明以降の江戸期重商主義論の展開に目を向けると、論者がみな武士階級に属していることもあって、その展開は、上のような利明の重商主義論の性格を、ほぼそのままに再現したものと言ってよい。経済論である以上に、政治論に傾斜した議論が、主流となるのである。以下では、佐藤信淵と横井小楠の著作に代表させつつ、江戸期重商主義論の幕末までの展開を、足早に整理することにしよう。

第1節 佐藤信淵の観念的重商主義論

1

佐藤信淵は、明和6年(1769年)、出羽国雄勝〔おがち〕郡西馬音内〔にしもない〕(秋田県雄勝郡羽後町西馬音内)に生まれた。³⁾ 信淵の生家についても、信淵自身の若年の経験等についても、正確なところは、ほとんどわかっていない。⁴⁾

16歳のとき(数え、以下同じ)旅行中に同行していた父を失ない、ひとり江戸に出た信淵は、以来、多くの先学に就き、また各地を遊学して、多種、多彩な知識を習得した。信淵は、25歳のときに、江戸京橋柳町に居を定めて、医業を始めた。翌年、妻を迎え、そのまた翌年、郷里から母を呼び寄せて同居したが、生活は必ずしも安定したものではなかったらしい。

その後、上総国大豆谷〔まめさく〕村（千葉県東金市大豆谷）に引きこもり、医業のかたわら、農業に従事したと伝えられている。

39歳のとき、知り合いであった阿波蜂須賀藩の家来に同道して徳島に向き、軍事技術顧問といった役に就任したが、2年足らずで職を辞し、江戸京橋柳町に舞い戻り、翌年には再度大豆谷村に引きこもっている。

野心家であった信淵は、事実上浪人の身であったから、仕官を強く望んでいたが、その望みはなかなかかなえられなかった。

信淵の場合、多種、多彩な知識を誇るとは言え、どの分野の知識も専門家と呼ぶには中途半端であり、独創性にも乏しかったきらいがある。たとえば、言わば本業である医業についても、どれほどの学識を有していたかは判然としない（信淵は、数多い著作を残しているが、医学に関して見るべきものはない）。また、信淵が言うところの佐藤家の家学を構成する天文学、地理学、鉱山学、土木学、農政学、兵学、経済学、政治学等も、個別的に見るなら、先人の説の受け売りといった水準を、大きく越えるものではなかった。

しかし、そうした反面、信淵が、実に幅広くあまたの知識を吸収して、自分のものにしていったことは事実である。そうした知識の幅が、彼に時代の転換点を敏感に感じとらせるとともに、のちに見るような「対外・対内両視野を併せ持つ統一国家の構想⁵⁾」を構築させることになるわけである。

それはここではともかく、信淵は45歳か46歳の頃、また江戸に移り住んで、幕府の神道方である吉川源十郎に入門した。さらに、47歳のときには、独特の国学を展開して当時名高かった平田篤胤にも入門している。篤胤はこのとき、信淵より年下の40歳であった。この平田国学との出会いが、信淵の経世論の国粹主義的性格を決定付けたと言ってよい。

ところで、信淵は48歳のとき、江戸払いに処せられている。吉川家の神明社のための勧進に出掛けた際に、無賃人足を徴発したことを、とがめられたものらしい。信淵には、貧していたためであろう、このような山師的

な側面があった。

信淵の著作活動が活発になるのは、この江戸払い以降のことであった。『経済要略』、『混同秘策』、『天柱記』など信淵の代表作は、江戸払い以降の時期に成立している。その後の信淵は、住居を転々としながら、数多くの著作をなし、自らの著作を大名や老中に献呈するなど、積極的な文筆生活を送った。大名家から経済的援助を受けたこともあったし、また領内視察に招かれたこともあったが、結局のところ、仕官の望みは最後まで達成されなかった。信淵は、晩年まで精力的に活動し、嘉永3年（1850年）、82歳で世を去っている。江戸払いを許された、翌年のことであった。

2

佐藤信淵は、54歳の作と言われる『経済要略』の冒頭を、次のような文で書き始めている。「経済とは、国土を経営し、物産を開発し、部内を富豊にし、万民を済救するの謂〔いい〕なり。」⁶⁾ここに見られるのは、江戸時代の経世家に共通の理解である。経世家たちにとって、経済とは、経世済民ないし経国済民であり、したがって、それは直ちに、経済政策を意味した。信淵にとっても、経済とは、「経済の政」⁷⁾に他ならなかった。

信淵は、上に続けて、大略以下のように言う——。経済の政をおろそかにすれば、国は必ず衰微し、上も下も困窮する。食物や衣類が不足すれば、万民は本来の生き方ができない。妊婦が墮胎したり、乳児の間引きが行なわれたりもする。困窮がはなはだしいときは、一家は離散し、老人など弱い者は飢え死にする。農地は荒廃して、農村は廃墟と化す。恐るべきことではないか。⁸⁾

こうした問題意識は、本多利明のそれを、ほぼそのままに踏襲したものと言ってよい。本多利明は、天明の飢饉の折に東北旅行で実見した農村の惨状に同情を寄せながら、経済政策の貧困を告発していた。東北の出身で

あった信淵にも、利明と同様の思いはあったのであろう。

利明の場合、農村の困窮の根本原因は、いわゆる「マルサスの人口論」を論拠として導かれる、国内生産力の不足だった。利明は、国内生産力の不足を、幾何級数的な人口増加の不可避的な結果として把握していた。だから、利明は、国内生産力の増進といった自然な方向に議論を進めることなく、国内生産力の不足という問題を、他国との交易によって生産力の不足を補うべきだという重商主義の主張に、直結してしまうことにもなるわけである。

これに対して、信淵は、「国土を經營して、つとめて開物の業を拓〔おしひろ〕め、貨物を豊饒にし、製造を精巧にして弘〔ひろ〕く他邦に輸し⁹⁾」という叙述に見られるように、国内生産力の増進をも織り込むかたちで、重商主義の主張を行なうことができた。数学者であった利明の場合、経世論を組み立てる材料は、わずかな体験と、書物から得たヨーロッパの知識だけであった。それに引き比べ、信淵は、鉱山学や農政学等の幅広い知識を有していたから、国内生産力の増進という自然な方向に議論を展開しえたのである。

とは言え、信淵の場合も、他国との交易そのものへの期待は、利明同様、並々ならぬものがあった。信淵は、たとえ国内生産力が不足するとしても、それは他国との交易の利益によって、十二分に償いうると考えていた。「土地の開けざるも害とするに足らず、物産の多からざるも患とするに足らず。¹⁰⁾」なぜなら、主として外国貿易の利益によって富国となった、イギリス等のヨーロッパ諸国を見ならえばよいのだから。これが信淵の見方であった。

信淵は言う。「それ土地の悪しきも物産の少なきも患〔うれえ〕るに足らずというゆえんは、たとえば西洋のイギリス・ロシア等諸夷の如きは、その本国みなともに北緯五十度より六十度の間にかかり、その気候寒冷のはなはだしきに論なし。ゆえに米穀も生ぜず物産も少なし。しかれども彼の

国の君臣〔……〕上下一致して国事を経営せしによりて、だんだん国富み兵強くなりて、今にては世界無双の富盛国となれり。¹¹⁾」というのが、信淵の認識であった。

そうした信淵の認識は、利明の次のような認識と、おおもとで一致するものと見てよい。利明は、以下のように言う。「わが日本国は〔……〕赤道以北三十一度より四十一度の間に所在して、寒暑等分、気候最良なり。¹²⁾」これに対して、「オランダ国は赤道以北五十二、三度の国土なれば、日本よりははるかに寒国にして〔……〕日本より見れば諸産物の出来おおいに乏しき土地なり。¹³⁾」しかるにオランダ国が日本国より富国であるのは、外国貿易の利益を享受しているからに他ならない。「欧羅巴諸国は、国王あって万民を撫育するに、渡海、運送、交易をもって、飢寒を救うを国王の天職とせり。ゆえに盗賊などは決してなし。¹⁴⁾」そして、海国である日本にとってこそ、「渡海・運送・交易は国家政務の肝要¹⁵⁾」なのだ。このように、利明は主張するわけである。

佐藤信淵の重商主義論が、本多利明の重商主義論の影響下にあったことは、否定できないところであろう。信淵の重商主義論は、対外進出主義という点でも、利明の重商主義論を継承するものだった。利明は、彼の関心の深かった蝦夷地等、北方の開発を繰り返し提唱している。ヒューマニストの面が強かった利明の場合、そうした対外進出は、どちらかと言えば、軍事侵略によって行なわれるものとしてよりも、平和的な経済侵略としてイメージされていたと考えてよい。それとは対照的に、信淵の対外進出は、戦争による軍事侵略として、明確に意識されていた。

信淵55歳の作と言われる『混同秘策』では、彼は、次のように主張する——。日本は、気候もよく、土地も豊かで、物産も豊富である。そして、四方を海に面しているから海運の利便もすぐれている。人も勇気があって、他国とは比べものにならない。世界を指導するべき要素をみな持っている。この神国日本の力をもってするならば、虫けらのごとき異国を征伐

し、「世界を混同して万国を統一せんこと、何の難きことかあらざらんや。」¹⁶⁾

恐るべき侵略主義と言うべきだろう。兵学の知識もあった信淵は、そうした世界侵略の具体的な構想をも案出していた。中国を手中に収めるべし、そのためには、まず満州を攻め取るべし、というのが信淵の構想だった。詳しく紹介する余裕がないが、信淵はそうした中国侵略のための、細かな作戦を展開している。その内容は、「百年を隔てて、太平洋戦争方式と不気味なまでの類似性を示」¹⁷⁾すものだった。

こうした信淵の提唱する対外経済政策の性格は、彼が提唱する対内経済政策の性格に、当然のごとくに反映する。強い侵略色を伴う対外政策と、強い統制色を伴う対内政策と、両者がメダルの裏表のようにして、信淵独特の重商主義的国家を観念させるのである。

『垂統秘録』（成立年不祥）で、信淵は、江戸時代の政治と経済のあり方を根底からくつがえすような、ひとつのシステムを提案している。信淵の主張によれば、士農工商という四身分階級は廃止されるべきで、農工商の三民は、新たに八民に再編成されるべきだとされる。八民とは、草民（農業に従事）、樹民（林業）、鉦民（鉦山業）、匠民（工業）、賈民（商業）、備民（陸運と陸軍）、舟民（海運と海軍）、漁民（漁業）である。そして、これら八民は、六府と呼ばれる行政機構に属するものとされる。六府とは、本事府（草民を統括）、開物府（樹民および鉦民）、製造府（匠民）、融通府（賈民）、陸軍府（備民）、水軍府（舟民および漁民）である。

信淵の提案するシステムでは、八民の業は兼ねることができない。たとえば、草民が農産物を商うことは、厳禁である。農産物は、自家消費用に屋敷内で生産されたものを除き、すべてが本事府にいったん納入される。そして、本事府から融通府に移送されて、融通府が賈民を動員して、草民を含む八民に売りさばくことになる。その代金は、本事府に還流するものとされている。

「農は国家の基根¹⁸⁾」, 「草民の人数は他の七民の総数より三倍あるにあらざれば叶わざること¹⁹⁾」, 「草民は八民中の上座たり²⁰⁾」などという発言に、当時の時代背景がにじみ出てはいるが、信淵が提案しているのは、この時代を一挙に否認して、まったく別の時代を現出させることであった。彼が主張しているのは、商業の国家独占であり、そのことを通じて、経済のすみずみまで国家が統制することだった。

信淵の観念する国家では、賈民以外は、買い手としてしか市場に参加できない。その賈民ですら、融通府という国家の行政機構に強く統制されるのだから、市場メカニズムは機能不全に陥ると考えざるをえない。「融通府は〔……〕多き所の諸物を少なき所に運び、安き所の物品を高き所に移して〔……〕常にその価を平準ならしめ、かつまたあまねく外邦に通商せしめ、互市交易の利潤を収めて国内を充実し²¹⁾」というの信淵の言葉であるが、事実上、商品経済はその一半が否定されていると見てよい。逆井孝仁氏の言葉を借りるなら、「生産者による市場形成はまったく問題にならない²²⁾」し、生産者たちは「きびしい統制のもとでいっさいの自由な経済活動を禁止され²³⁾」ることになるからである。

信淵の提唱する統制経済は、商品経済の一半を否定するものであるから、見方によるなら、それは社会主義の主張に見えなくもない。『垂統秘録』では、国費による学校経営や、また国費による救貧施設、療養施設等の経営も語られているから、なおさらそうした誤解は生じやすいところであった。こうしたところから、河上肇氏の次の発言が誘発されることになる。「信淵の説のごときは、けだしわが国土において西洋思想の影響を受けずして発育せられたる社会主義的思想の萌芽の最大なるもの〔……〕²⁴⁾」しかし、それは買いかぶりが過ぎると言わざるをえない。信淵が表象する国家とは、「絶対主義国家²⁵⁾」であり、それも「徹底した絶対主義国家²⁶⁾」に他ならないからである。

3

信淵の重商主義論が本多利明のそれと相違する点は、信淵の重商主義論の具体性にある。利明の重商主義論は、おそらく、その実現がまだまだ遠い将来の事柄として了解されていたためであろう、重商主義政策の具体的な中身については、ほとんど明らかにすることがなかった。それに対して、信淵の重商主義論は、幅広い彼の知識をフルに活用した、実に具体的なものとなっているのである。

信淵の構想する国家では、八民が六府によって強く統制されながら、生産物の増大に邁進することが要求される。「六府おのおの其の配下の民を撫御して其の産業の民を講究せしめ、日夜もっぱら其の業を務めて怠惰すること無からしめ、各自に其の精力を尽くさしむ。かくの如くにして年月を重ねるときは、いずれの産もみな習熟の功を積みて自然に精妙にいたり、漸次にあまたの利潤起こりて国家益々富盛すべし。」²⁷⁾ こうした生産物の増大策が、信淵の重商主義論の一方の柱だった。

信淵の信淵たるゆえんは、そのような生産物の増大策を、産業別、品目別に、こと細かに述べているところにある。たとえば、農業についての信淵の発言を拾っていくと、気候や土地の性質に適合した作物が選択されねばならないこと、作物の利用部位が根、茎、皮、葉、花、実のいずれであるかによって作法が異なること、これらが述べられた上で、増産されるべき作物の名が、分類されつつ、数十種類もあげられている。こうした、具体性は、鉱山業や工業等の場合も同様であり、信淵の議論の印象を、他の江戸期の重商主義論者の議論からきわ立たせているのである。

しかしながら、そうした具体性は、逆説的ではあるが、信淵の議論に強い観念的性格を付与せずにはおかない。構想が具体的であればあるほど、その実現可能性が問題となってくるからである。

信淵の重商主義論のもう一方の柱である、官僚的・中央集権的な政治制度についても、同じことが言える。信淵の構想する国家は、彼が東京とも呼ぶ、江戸に王都を建設するものとされている。そして、信淵は、「およそ皇都を建つる法は、皇城を中央にして、西に皇廟あり、東に大学校あり〔……〕²⁸⁾」と、設置すべき施設の概要等を含めて、非常に具体的に、彼の首都建設プランを述べているのである。だが、このように具体的なプランが提示されるとき、そのプランを実現すべき財源等はどのようにするのか、といった問題が生ぜずにはおかない。にもかかわらず、信淵はこういった問題には一向に頓着していない。信淵の重商主義論は、実現可能性という点を度外視した、観念的議論に陥っているのである。

本多利明が活躍した18世紀の終わりとは異なり、信淵が活躍した19世紀の初めには、海防問題が焦眉の急を告げていた。1806～7年にかけて、ロシア船が樺太、エトロフ、利尻等に相次いで侵入し、番所、運上屋、幕府船を攻撃するという事件が発生。また、1808年には、イギリス軍艦フェートン号がオランダ船を捕獲するために長崎に侵入し、出島のオランダ人を逮捕した上で、水や食糧等の供出を無理強いして去るという事件も起きている。

こうした状況に対して、幕府は的確な対応ができないでいた。このことが、幕府への不信感を強め、やがて倒幕運動を巻き起こすことになるのであるが、信淵の重商主義論も、このような時代背景の影響を強く受けたものだった。海防能力を備えた統一国家を建設すること、重商主義政策によって富国を実現すること、すなわち明治政府の課題とした富国強兵が意識されたが、その課題を遂行すべき主体はどこにも存在しなかった。

こうして、信淵の描く理想国家は、実現可能性を棚上げにしたままで、しかし、強い危機感に切迫されて、具体的に述べられざるをえない。具体的であればあるほど観念的になるというパラドックスは、そのような理想と現実との越えがたいギャップのはざまに生ずるのである。信淵は、「強

い対内外の危機意識をもったために当時の日本の現実をはるかにとびこえてかなり空想的に近代化の方向を模索せざるをえず²⁹⁾」といった関係が、ここにはあることになる。そして、「江戸の地に王都を建て³⁰⁾ることを主張したときに、そこではもう幕府は無視されてしまっていた」のである。

そうした信淵の議論の観念的性格を助長したのが、平田国学の影響だった。信淵が構想する国家に伴なう侵略主義の根底には、平田国学が持つ非合理的な国家観があった。『混同秘策』の冒頭に示されているのは、次のような国家観である。「皇大御国は大地の最初に成れる国にして世界万国の根本なり。ゆえによく其の根本を経緯するときは、すなわち全世界ごとごとく郡県となすべく、万国の長みな臣僕となすべし。」³¹⁾そして、信淵57歳のときに完成したと伝えられる『天柱記』の冒頭には、次の叙述がある。

「皇国は、イザナギ・イザナミの二神かつて皇祖天神の詔を受けて修造したるところにて、大地の最初に成就し、天孫の天降り以来、皇祚無窮に連綿して、天地とともに悠久なり。実に万国の基本たるに論なし。」³²⁾

ここに見られるのは、信淵が有するいくたの学識を超越する、非合理的な権威としての皇国日本である。信淵は、このような非合理的な、それゆえまた自己を限定することの少ない国家観に依拠することによって、彼の観念的な重商主義国家の像を、現実の国家が持つ限定に配慮することなく、具体的に提起できた。それは、非合理への一種の逃避ではあったが、その逃避によってかろうじて信淵は、彼の構想する国家を、現実から隔離した地点に、だから観念的なものとして確保しえたのである。

第2節 横井小楠の現実的重商主義論

1

横井小楠は、文化6年(1809年)、肥後熊本細川藩の家来の次男として生

33) まれた。横井家は知行150石取りで、藩内のかなりの重職をも務める家柄であったが、知行150石は当時、手取りで30石足らずにしかならず、横井家の家計は楽ではなかったらしい。まして、小楠は次男であったから、家督を継ぐ見込みはなく、学問で身を立てる以外に立身の道はなかった。

10歳の頃、小楠は藩校である時習館に入学した。以来、文武両道に精勤し、15歳のときには詩作進歩のゆえに、また21歳のときには武芸上達のゆえに、賞詞を受けたと伝えられている。25歳になると、前途有望な秀才か門閥の師弟かを条件とする居寮生に選ばれ、23歳で父を失ってから兄の厄介者になっていた重荷を、いくぶん軽くすることができた。さらに、29歳のときには、居寮長を拝命し、毎年10俵の米を給されるようにもなった。率直な性格の小楠は、若い居寮生たちと親しく交わり、かなりの人望をかちえていたらしい。

小楠は、31歳のとき、江戸への留学を命じられた。小楠の身分から考えて、異例の抜擢と言ってよいだろう。小楠が江戸に到着したのは、4月のことであった。以来小楠は、後期水戸学の中心人物である藤田東湖と親しく交わる一方、水戸藩主徳川斉昭の懐刀と言われた川治聖謨との会見を初め、多くの人を訪れて、見聞を広めることに努めている。通例に従い、林大学の頭に面会してその門下にも入っているが、昌平校から得るところは少なかったようである。

この年の12月、小楠のいわゆる「酒失」事件が生じた。藤田東湖に招かれた忘年会の席上、小楠が披露した漢詩一篇が政治批判を含んでいた点を、藩江戸留守居役に問題とされたのである。連絡を受けた国元の藩庁は処分不要との意見を江戸に書き送ったが、江戸留守居役は国元からの書状が届く前に、小楠を江戸から追放した。小楠の江戸留学は、一年に満たない短期に終わることになった。

小楠は、熊本に戻ってからは、理論よりも実践を重視する、実学党と呼ばれるグループの、中心的存在となる。35歳のときには、私塾を開いてい

る。最初は入門者も少なかったが、やがて門弟が増えて、小楠の生活はようやく安定してくる。（「酒失」事件以降、小楠は、再び兄の厄介者を余儀なくされていた。）

小楠は、43歳の折、諸国遊歴の旅に出た。柳川を振り出しに、久留米、下関、広島、岡山、姫路、大坂、奈良、京都、名古屋、福井、金沢、山口、小倉、福岡など、多くの町を訪れ、また多くの人士と会っている。

旅行から帰った小楠は、45歳になって妻を迎えた。小楠47歳のときに兄が亡くなり、兄の残した男児が幼少であったため、小楠が兄の順養子となって家督を継ぐことになった。小楠は今さら役人になる気はなかったから、迷惑なことであった（もっとも、役人にはならないで済んだ）。兄の死によって家族が一挙に増え、小楠夫婦に、実母、養母（兄嫁）、甥がふたり、姪、それに女中の計8人が、少ない収入で暮らさなければならなくなったこともあって、小楠は、郊外の沼山津に転居した。農村の方が城下よりも、万事安くつくからである。

小楠は、50歳のとき、越前福井藩主松平春嶽に招かれて、福井の地に赴いた。松平春嶽は小楠に会ったことはなかったが、藩士を通じて小楠の学識を聞き及んでいた。また、小楠がかつて福井藩に提出した文書によっても、小楠の見識を確認することができた。福井藩は、小楠をかなりの厚遇でもって迎えた。以後小楠は、春嶽の政治顧問として、福井藩の藩政改革や殖産興業にたずさわることになる。また、春嶽が幕府の政治総裁を務めた折には、幕政にも間接的に関わっている。そして、そうした政治への関与で発揮された小楠の現実的識見が、彼の名声を次第に高めていった。

後期水戸学派の影響を強く受けていた小楠は、若い頃は攘夷論者であった。しかし、45歳の頃より、次第に開国論者に転じてゆく。1853年にペリーが軍艦を率いて来航するや、攘夷が非現実的であることを悟った小楠は、「有道の国」とは交わるべしという立場に移行している。そして、西洋文明に対する理解が深まると、さらに開国論に接近。やがては、開国論者

に転じてゆくのである。

こうした小楠の現実的姿勢は、勝海舟のような現実主義者の多とするところであったが、急進的な尊皇攘夷論者から見れば、一種の裏切りに他ならなかった。54歳のとき、小楠は、肥後勤王党に暗殺されかかっている。肥後藩江戸留守居役の別宅の二階座敷で、留守居役、肥後藩士と三名でいたところを襲われた小楠は、梯子段近くにいたため、素早く脱出して危難を逃れた（三名とも、大小の刀を身に引き付けていなかった）。小楠は、肥後藩邸で差し替えの大小を帯び、藩士十名ばかりと現場に急ぎ戻ったが、すでに刺客の姿はなかった。襲われた際に小楠と同席していた藩士は軽傷で済んだが、留守居役は死亡した。この事件によって、小楠は、「土道忘却」の罪で、武士身分を剥脱されてしまう。いち早く現場から逃れた点を、とがめられたのである。しかし、越前の松平春嶽が経済的援助を惜しまなかったから、生活に困窮することはなかった。

明治元年（1868年）、60歳の小楠は、明治政府の要職である、議政官参与に就任することになる。旧越前藩士で、明治政府の財政にたずさわっていた、由利公正の推薦によるものだろう。同役には、大久保利通、木戸孝允、後藤象二郎、副島種臣など、そして由利公正がいた。しかし、小楠はこの職に一年と留まることがなかった。明治2年1月5日、小楠は、籠で京都市中を通行中、暗殺されてしまうのである。小楠がキリスト教に一定の理解を示していた点を国粹主義者に弾劾されたものとも、小楠の存在が邪魔だった反動的な公卿の差し金によるものとも、伝えられている。

2

横井小楠が攘夷論者から次第に開国論者に転じていったことは、小楠がナショナリストであるのをやめたということを示し、必ずしも意味しない。攘夷か開国かという問題は、現実的な政治の観点に立つとするなら、いずれ

にせよその選択は、日本にとってどちらが有利かという、手段の選択の問題となるからである。後期水戸学のように国粹主義的な立場に立脚するとしても、現実から遊離しないで問題を考えるとすれば、それは同様である。山崎益吉氏の言葉を借りて言うと、「国威の発揚が究極の目的であるから、攘夷や開国はそのときの情勢によってどうにでも解釈できる〔……〕要は国威の発揚にとってどちらが有利であるか、ということに関わってくる³⁴⁾」からである。小楠が攘夷論から開国論へとすみやかに移行できたのも、彼が問題を常に現実的に把握しようとしていたからだと受け取ってよい。それは、テッサ・モーリス・鈴木の言うように、「小楠のプラグマティックな政治思想³⁵⁾」のたまものだった。

では、そうした小楠の現実的な政治思想は、彼にどのような経世論を展開させたのだろうか。ここでは、1860年、小楠52歳のときの作である『国是三論』によりつつ、それを見ていくことにしよう。

小楠は、鎖国の害に関連して、大略次のように言う——。鎖国が行なわれた二百年前は、乱世に続く時代であったため、人々の暮らしも質素であった。しかし、太平の世の中が長くなると、上も下も次第にぜいたくになり、物価が上昇する。農、工、商の三民は、労力をもって生活するから、物価の上昇が労力の価の上昇をもたらす限りにおいて、問題はない。だが、士の場合は、そうはいかない。収入が増えず、支出ばかりが増えるのだから、士は困窮するようになる。そうした士の困窮が、苛斂誅求を結果し、結局三民にも困窮が及ぶことになる。こうした困窮を脱するためには、儉約が有力な策ではあるけれども、ぜいたくに慣れてしまった人々には儉約は困難であり、儉約を無理強いすれば政治不安を招く恐れもあるだろう³⁶⁾。

だから、と小楠は言う——。こうした国が困難に陥っているときに、攘夷などおぼつかないことである。万国が自由に航海し、交易をしている中で、日本ひとりが鎖国に固執するなら、必ず外国は攻撃してくるだろう。

それなのに、こちらにはその攻撃に立ち向かうだけの国力がない。これこそが、鎖国の害なのである。³⁷⁾

このように、小楠の開国論は、国の経済力不足という現状認識に強く結びつくものだった。小楠によれば、鎖国の弊害は、「たとえば一斗なれ一升なれ、升をもって斗〔はか〕りたるごとく、何事も其の升内にて弁ぜざる事を得ず³⁸⁾」という点にあった。小楠の言では、何事も升内ということは、飢饉の折にも食糧を他国から手当てできないことであり、また、「民間の生産も搬出する先々に限りあれば、出すこと多ければ必ず其の物品壅滞〔ようたい、塞がり滞ること〕し其の価を低く³⁹⁾」するということである。

見られるように、鎖国によって、需要は供給を見出せず、供給は需要を見出せない、という理解が小楠にはあった。こうした経済的不合理をもたらす鎖国とは、参勤交代等の藩経済力の抑制策と軌を一するものだ、と小楠は喝破する。だから、小楠にとって鎖国は、「徳川御一家の便利私営⁴⁰⁾」の一環に過ぎない。どうして開国して通商・交易しない法があろうか、という結論に導かれるのは当然だろう。

ところで、小楠がイメージした重商主義国家は、江戸期の経世家の伝統に忠実に、政治が経済を指導・管理するという、統制色を伴っていた。ただし、小楠の重商主義国家には、佐藤信淵の場合のような強い統制色はない。小楠は、次のように言う。「そうじて民間に生産するところ、旧来ことごとく商賈の手に売り渡すゆえに、其の価もっともいやしく、なかんずく姦商に逢えば種々の欺詐を受けて、其の半価を得て止む者もまた多し。これを官府に収むべし。⁴¹⁾」ここには、相も変わらぬ商人敵視の思想が、見え隠れしていると言ってよい。小楠は、おなじみの官営商業・官営貿易を提唱するのである。

とは言え、小楠が提唱する官営の商業・貿易は、官の利益の増大よりも、民の利益の増大を重視するという点で、ユニークな面を持っていた。小楠は、商品を官に収める際の価格の決定について、こう言う。「其の価は

民に益ありて官に損なきを限りとし、官において別に利を見る事なければ、民自ら其の恵みをこうむるべし。⁴²⁾」また、こうも言う。「横浜、長崎等より物品月々の相場を聞き調べ、民間にて売るところの相場に引き当て、諸港への運賃其の余の雑費を加え、官府に損なくば民の乞うに任せて精々高価に買うべし。⁴³⁾」ここには、民間から買い入れた商品を外国へ輸出して得られる利益を、民間にできるだけ還元しようという発想が見て取れる。再び山崎益吉氏の言葉を借りれば、「小楠の貿易論は、民間貿易を止め官府貿易を奨励し、もって民の利をはかり『経世済民』に資さんとする⁴⁴⁾」ところに特徴があるのである。

小楠は、以下のように、外国貿易の拡大に必要な殖産興業についても、忘れずに論じている。「諸物品を作り出し或いは作り増さんと欲すれども、力足らずして意のごとくなる事を得ざる者多し。官またこれに錢穀を貸して其の意を遂げしめ、其の物品を官に収め、其の価によって其の債を償わしめ、また利息を見る事なければ民大いに便を得てかつ恵みをこうむるべし。⁴⁵⁾」

小楠の面白いところは、殖産興業に関連して、武士の生産者化を積極的に説いていることである。小楠の言によれば、武士の次男などには、才能に応じて給与を与え、仕事に就かしめるべきである。富国強兵が緊急の課題なのだから、志ある者は海軍に登用すればよい。農業に従事し、事あれば陸軍に参加するという者もいてよい。「其の他刀匠・銃工を初め、国用に充つべき事に力をつくさんと願うものは、ことごとく請いに任すべし。⁴⁶⁾」さらにまた、小楠は、武士の娘や妻も、生産者化してよいと主張する。小楠の述べるところでは、武士の娘たちには、養蚕や紡績、織物など、何でも好きな道を選ばせ、物的な助力を与えて、自らの労力で生活できるようにするべきなのである。そして、同様のことは、武士の妻にもあてはまる。「一藩の婦女をして養蚕の術をなさしめば、各自の富足を得るのみならず、遂に国用を裨益するの偉績をなすべし。⁴⁷⁾」

軍事とその関連産業，あるいは農業とその関連産業しかあげられていない点に，伝統的思考の名残りが見て取れるけれども，小楠の上の主張は，事実上，士農工商という身分秩序に風穴をあけようとするものであろう。小楠は，どれほど意識的であったかはともかく，職業変更を自由化する方向に進んでいると考えてよい。「レッセフェールを支持していたわけではない」⁴⁸⁾にせよ，小楠は，新しい時代の到来を，ある程度予見していた。それも，彼のすぐれた現実感覚のたまものだったろう。

3

小楠の重商主義論に問題点が存するとすれば，それは，彼の経済認識にある。佐藤信淵のそれに比べ，はるかに現実的な重商主義国家を構想した小楠ではあるが，経済の現実的把握となると，いささかおぼつかないところがあった。佐藤信淵の場合ほどではないが，商品経済の諸作用や商業の機能に対する理解に，不十分な点が目立つのである。

たとえば，民の利を増進するために，官が民から取る利は制限されるべきだと，小楠は主張するが，では官の経費はいかにしてまかなわれるのか。「官府の利は外国より取るべし」⁴⁹⁾と小楠は言うが，外国貿易を甘く見過ぎてはいないだろうか。次のような発言も，樂觀が過ぎると言わざるをえない。「財用の融通，鎖国の昔日に比すれば大いに其の便宜を得たりと云うべし。今や民間に無量多数の生産ありとも，これを海外に運輸すれば価を減ぜず，かつ壅滞のうれいなし。」⁵⁰⁾日本産の商品が販路を確保できるかどうかは，価格次第であろう。「民の乞うに任せて精々高価に買うべし」というような放漫な経営では，価格競争力が問題となるに違いない。また，価格競争力を保持しようとするなら，「民の乞うに任せて」というわけにはゆかなくなるはずである。こうした問題の所在について，小楠は，気付いていないようなのである。

また、殖産興業のための融資策についても、同様の楽観がある。「先ず壹万金の銀鈔〔ぎんしょう、銀札〕を製し、民に貸して養蚕の料に充て、其の繭糸を官に収め、これを開港の地に輸し洋商に売るならば、大約壹万千金の正金を得べし。かくのごとくなれば楮札〔ちょさつ、紙幣〕数月を閲せず〔けみせず、数えず〕して正金となって言うべからざるの鴻益〔こうえき、大きな利益〕あるのみならず、加うるに千金の利あり。⁵¹⁾」この千金の利を、例によって、民のために役立てよと小楠は言うのであるが、それはともかく、問題は、繭糸が首尾よく一万一千金で売れるかどうかである。また、こうした融資が物価を騰貴させないかどうかも問題となろう。「ただに繭糸のみならず、民間の所産製するにこの法をもつてし⁵²⁾」というように、こうした融資を拡大するならば、物価の騰貴は避けられないはずである。

しかし、小楠は、「正金の融通自在なれば、物価の高きはうれうるに足らず⁵³⁾」として、そうした問題を一掃してしまうのである。正金の準備さえあれば、紙幣はいくら発行してもよいと、小楠は主張するわけである。だが、そう考えるとすれば、今度は正金の十分な準備をどのようにして蓄積するのか、という新たな問題が生じてくる。

このようにして、小楠の経済論をよく見てゆくと、問題が問題と呼び、解決をえられないままに堂々めぐりしてしまうのである。それも、小楠が、商品経済についての一定の知識を持ちながらも、商品経済の自律性という認識を欠いていたからに他ならない。そういう点では、小楠の重商主義論は、本多利明や佐藤信淵の重商主義論と同様の欠陥を含んでいたと言ってよい。小楠の場合も、往々にして、経済は政治に従属し、政治の力でいかようにでもコントロールできるものとして、受け止められてしまうのである。

おわりに

海保青陵や、本多利明に始まり、佐藤信淵を経て、横井小楠にいたる、江戸期における重商主義論の展開を、簡単に整理しておくことにしよう。

海保青陵の重商主義論は、一藩重商主義論であったから、鎖国を旨とする幕藩体制と矛盾するところがなかった。それゆえ、青陵の議論は、具体的かつ現実的でありえた。青陵は、各地を遍歴して身に付けた、当時の商品経済に関する具体的知識によりつつ、実現可能な一藩重商主義政策を提言できた。青陵の重商主義は、商利を肯定した上で、武士も商利を追求してよいのだという主張を含んでいたから、商品経済の合理性認識の点でも、すぐれた面を持っていた。

これに対して、本多利明の重商主義論は、一国重商主義論であったから、鎖国・幕藩体制との矛盾は避けられなかった。それゆえ、利明の議論は抽象的なものでしかありえなかった。利明の時代、幕藩体制は矛盾を抱えながらも、まだ危機的状況にはなかったから、利明は、言わば安んじて、彼の一国重商主義論を抽象的なままに放置しておくことができた。利明の重商主義論は、商利を明確に肯定していなかったから、商品経済の合理性認識の点では海保青陵に及ばず、経済論の面よりも政治論の面が強かった。

佐藤信淵の重商主義論は、本多利明の重商主義論の影響下にありながらも、具体性という点では、利明の重商主義論を一步前進させたものだった。ただし、幕藩体制に代わる統一国家の形成はまだ現実性を帯びていなかったから、信淵の重商主義国家の構想が具体的になればなるほど、その構想は観念性を強めるという逆説があった。信淵の時代、フェートン号事件などが起こり、幕藩体制は危機を迎えつつあったから、信淵は強い危機感から、彼の重商主義国家を具体的な形で提起せざるをえなかった。信淵の構想する重商主義国家は、統制色が極めて強く、そのため、経済は政治に従

属しうるかのような議論が行なわれた。

横井小楠の重商主義論は、佐藤信淵のそれに比べ、はるかに現実的な重商主義国家の像を示すことができた。小楠の時代、幕藩体制は崩壊寸前であり、統一国家の形成は目前であったから、小楠はある程度の見通しを持って、現実的な重商主義国家の構想を打ち出すことができた。小楠の時代、ヨーロッパ等の外国に対する知識が急速に広がったことも、小楠の現実主義思考を支えた。だが、外国貿易に期待する余り、商品経済のメカニズムにあまり関心を示さないという、利明、信淵以来の伝統は、小楠も共有していた。小楠の場合も、経済は多かれ少なかれ政治に従属するかのような把握がなされた。

以上の整理から、次のように結論できよう。江戸期に展開されたわが国重商主義論は、経済論である以上に政治論の性格が強かった。したがって、その展開は、必ずしも商品経済の諸機能や諸法則に対する理解を深めるものではなかった。だからまた、その展開は、イギリスの重商主義が古典派経済学の成立を準備したような、そういう役割を果たしうるものではなかった。

とは言え、そのことは、わが国経済思想の貧困を物語るものではない。むしろ、西洋に比べ、遅れた経済状況、遅れた文化状況の中で、わが国固有の重商主義論が展開されえたことは、少なからず評価されてよい。わが国重商主義論が、洋学の伝統の中ではなく、儒学の伝統の中で展開された点も、改めて注意しておく必要がある。儒学者であった海保青陵や横井小楠は言うまでもなく、数学者であった本多利明や、医者であった佐藤信淵も、儒学の思考法によりつつ、重商主義を論じたのであった。こうしたわが国独特の経済思想に先行されたことは、明治以降のわが国への西洋経済学の摂取・導入を容易にしたであろうし、また、いくぶんのバイアスをもたらしたであろう。そういう意味でも、江戸期における重商主義論の展開は、見過ごすことのできない重要性を持つと思われるのである。

- 注 1) 石田梅岩の商業職分論と山片蟠桃の自由市場論については、折原裕「江戸期における商利肯定論の形成——石田梅岩と山片蟠桃——」（『敬愛大学・研究論集』第42号，1992年9月）を参照。また、海保青陵の一藩重商主義論については、折原裕「江戸期における重商主義論の成立——海保青陵と本多利明——」（『敬愛大学・研究論集』第43号，1993年3月）を参照。
- 2) 本多利明の一国重商主義論については、折原裕「江戸期における重商主義論の成立」（上掲）を参照。
- 3) この項の記述は、戦前の研究であるが、森銑三氏の『佐藤信淵』（今日の問題社，1942年）——『森銑三著作集』第9巻，中央公論社，1971年——に多くを負っている。「佐藤信淵は、私には好ましからざる人物である」（上掲著作集，497頁）と公言する森氏の研究によることは、信淵の人物像に関し、片寄った見方に陥る危険がないわけではない。しかし、森氏の研究は、戦前の国粹主義的な見地からする信淵美化の風潮に抗して提出されたものであり、その叙述はかえって慎重、客観的なものとなっている。森氏は、信淵が自著の中で述べている自伝的記述の多くに疑問を提起しているが、信淵の記述のすべてに疑問を提起しているわけではない。森氏が疑問を提起していない部分に関しては、信頼度が高いと推定されることにもなるわけである。この項は、そうした部分を拾い集めることで成り立っている。
- 4) 佐藤信淵は、佐藤家は5代以前より、農政学、兵学等の学を極めた家であり、信淵の学問体系は、佐藤家の家学であると称している。しかし、これは、信淵が自らの出自を立派に見せるために行なった、虚言であった。信淵が言う父祖たちの著作は、まったく現存していないのである。こうした点を把えて、森銑三氏は、「家学は信淵一代に捏造するところ」（上掲著作集，326頁）と批判するわけである。もっとも、そのように虚言を用いてまで自己を売り込もうとする信淵の姿勢自体は、仕官を強く望む者に有りがちなことだったとする、同情的な見方もある。たとえば、塚谷晃弘氏の次の発言がそうである。「処士身分としての失業知識人が、一つには生活のため、一つには自己のあり余る才能と知識を発揮せんがため〔……〕浪人の境涯を脱して禄仕を求めたことを責めることはできない。」（塚谷晃弘「佐藤信淵の思想史的考察・序論」、『国学院経済学』第20巻，第4号，1972年1月，131～132頁）。
- 5) 塚谷晃弘，上掲，129頁。
- 6) 佐藤信淵『経済要略』（『日本思想大系』第45巻，岩波書店，1977年）522頁。
- 7) 同上，522頁。
- 8) 同上，522頁。
- 9) 同上，524頁。
- 10) 同上，526頁。

- 11) 同上, 526頁。
- 12) 本多利明『西域物語』(『日本思想大系』第44巻, 岩波書店, 1970年) 91頁。
- 13) 同上, 91頁。
- 14) 本多利明『経世秘策』(『日本思想大系』第44巻) 20頁。
- 15) 同上, 20頁。
- 16) 佐藤信淵『混同秘策』(『日本思想大系』第45巻) 426頁。
- 17) 塚谷晃弘, 上掲, 143頁。
- 18) 佐藤信淵『垂統秘録』(『日本思想大系』第45巻) 494頁。
- 19) 同上, 495頁。
- 20) 同上, 495頁。
- 21) 同上, 501頁。
- 22) 大石慎三郎編『日本史(5)』(有斐閣, 1978年) 204頁。
- 23) 同上, 204頁。
- 24) 河上肇「幕末の社会主義者佐藤信淵」(『京都法学会雑誌』1909年) ——『河上肇全集』第6巻, 岩波書店, 1982年——346頁。
- 25) 日本史研究会編『講座・日本文化史』第6巻, 1963年, 三一書房, 186頁(安丸良夫氏稿)。
- 26) 塚谷晃弘, 上掲, 146頁。
- 27) 佐藤信淵『垂統秘録』488頁。
- 28) 佐藤信淵『混同秘策』441頁。
- 29) 日本史研究会編, 上掲, 200頁(安丸良夫氏稿)。
- 30) 松浦玲「江戸後期の経済思想」(『岩波講座・日本歴史』第13巻, 1964年) 152頁。
- 31) 佐藤信淵『混同秘策』426頁。
- 32) 佐藤信淵『天柱記』(『日本思想大系』第45巻) 366頁。
- 33) この項の記述は主として, 圭室諦成『横井小楠』(吉川弘文館, 1967年) に多くを負っている。
- 34) 山崎益吉『横井小楠の社会経済思想』(多賀出版, 1981年) 68頁。
- 35) テッサ・モーリス・鈴木/藤井隆至訳『日本の経済思想——江戸期から現代まで——』(岩波書店, 1991年) 67頁。
- 36) 横井小楠『国是三論』(『日本思想大系』第55巻, 岩波書店, 1971年) 439~440頁。
- 37) 同上, 440頁。
- 38) 同上, 441頁。
- 39) 同上, 441頁。
- 40) 同上, 448頁。
- 41) 同上, 442頁。

- 42) 同上, 442頁。
- 43) 同上, 442頁。
- 44) 山崎益吉, 上掲, 98頁。
- 45) 横井小楠『国是三論』442頁。
- 46) 同上, 444頁。
- 47) 同上, 444頁。
- 48) テッサ・モーリス・鈴木, 上掲, 68頁。もっとも, 小楠のこうした面を高く買って, 「わが国における自由主義経済思想家としてのファースト・ランナーを小楠に見出さなければならぬ」(山崎益吉, 上掲, 126頁)とする立場もある。
- 49) 横井小楠『国是三論』442頁。
- 50) 同上, 444～445頁。
- 51) 同上, 445頁。
- 52) 同上, 445頁。
- 53) 同上, 445頁。